



特別
子12
3643
66



上

十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
如	聲	聲	冰	志	養	久	竹	七	弓	三
之	反	所	室	負	志	心	蕭	長	橋	歲
歲	一	十	九	八	七	六	五	四	三	二
戴	一	十	九	八	七	六	五	四	三	二
賴	忠	敦	八	經	道	李	右	右	右	白
反	則	篤	鴻	政	遠	虎	近	近	近	野



故
梅若誠本郎氏
昭和四年正月
梅若重氏
寄贈

廿四	田村	三十六	之世
廿六	朝長	三十八	宗女
廿七	藤	三十九	東北
廿八	巴	四十	夕歌
廿九	松草	四十一	釣歌
三十	松風	四十二	浮船
三十一	江口	四十三	玉菊
三十二	中支	四十四	中支
三十三	井筒	四十五	梅枝
三十四	聖歌	四十六	中支

四十七	松法	五十二	并奇
四十八	松法		
四十九	松法		
五十	松法		

下

一	百方	七	河清
二	柏橋	八	柏橋
三	清原	九	善歌
四	楊川	十	中支
五	如人	十一	海木
六	善歌	十二	之世

十三	雙	松	廿	唐舟	廿	高虫	廿	安運系
十四	少	極	廿	唐舟	廿	高虫	廿	安運系
十五	山	姥	廿	山姥	廿	南田川	廿	南田川
十六	海	士	廿	海士	廿	あさり	廿	あさり
十七	着	派	廿	着派	廿	自心坐	廿	自心坐
十八	舟	福	廿	舟福	廿	あさり	廿	あさり
十九	中	鹿	廿	中鹿	廿	徳取	廿	徳取
二十	着	戸	廿	着戸	廿	禪魁	廿	禪魁
廿一	着	屋	廿	着屋	廿	秘傳	廿	秘傳
廿二	教	志	廿	教志	廿	舍利	廿	舍利
廿三	船	舟	廿	船舟	廿	あさり	廿	あさり

三十七	大	松	四九	大	級
三十八	輪	松	五十一	源	松
三十九	花	月	五十二	睦	松
四十	新	木			
四一	王	松			
四二	古	浦			
四三	新	尾			
四四	新	田			
四五	石	橋			
四六	雲	心			
四七	月	舟			
四八	野	舟			

一 言妙

甲 此の夜も捕物する所は浦を
 といふ人其のくそを本に謂ふ
 といふてい 此物今も 中入
 といふ誰の方 此方にも 甲 浦の
 有と云ふて其いへ 畏てい
 由浦の人の流やいふころ
 けい人のいふと云ふるらなを
 けいせむらひが其つてあつた
 といふ 甲 由浦の者といふて其い
 といふ 甲 是れ五初いこのおあよ
 といふ 甲 是れ神立にして其 由浦始て

由社の山槽又其本返流の爲
赤松の山槽又其本返流の爲
由流は老りて一里一廿の由
流より原の由をかくお流の
まが中にまが流の流もたは
今其れは流いもまが流を
くお流をたはゆりかき
まが由社の山槽又其本返流作
のも細いものも流も一
流も流もいもたはゆりかき
名も流も一もまが流も一
ゆ流も一も流も一も流も一

三 老松

くくくくくくくくくくくく
ていん流も一も流も一も流も一
くくくくくくくくくくくく
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
まが流も一も流も一も流も一
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
くくくくくくくくくくくく
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら

多入 長てい 七葉の人の海を
しうこく ちうく(の)せもまらる
しうけい ちうくまてまらる
こく 七葉の海を(の)ちうくまらる
新の人のちうくまらる(の)七葉の
長林のちうくまらる(の)七葉の
清つてまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の
わらわら(の)七葉のちうくまらる
のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の
よのちうくまらる(の)七葉の

引見ら(の)七葉のちうくまらる
七葉のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の

七葉のちうくまらる

七葉のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の
七葉のちうくまらる(の)七葉の

此子面者所つくはくぬく
まゝとて流しゆくもいかに
しよめは秋のついでに
かゝ初はあはれあてりあふ
ふかしの木よとていかに
くつとてあはれあふ
も路のくつとて流しゆく
ふかしの木よとていかに
君とくつとてあはれあふ
あはれのついでに
あはれあふいかに
うらたまりあはれあふ

あはれあふいかに
あはれあふいかに
あはれあふいかに
あはれあふいかに
あはれあふいかに

+ 那波

あはれあふいかに
あはれあふいかに
あはれあふいかに
あはれあふいかに
あはれあふいかに

+ 那波

あはれあふいかに
あはれあふいかに
あはれあふいかに
あはれあふいかに
あはれあふいかに

張成見其ひしてふんじく
と長よらあまの夜よま
いしよとふんじくあま

十五 右道

いふに張るもつはあまの
看とつれてまらくあま
そら麻鴨の林池のわが
初てじふよまあつていふ
のさ津又うらんのさ津の
多細のやう流つてあま
あくさあま流まはるあ
てんじふのさ津あまの

取初てさ津のあまのさ津の
くくさあまあまのさ津の
言葉とあつしてふんじく
いふに津とあまのさ津の
月の印津あまのさ津の
すてあまのさ津のさ津の
不甲あまのさ津のさ津の
初あまのさ津のさ津の
てさ津のさ津のさ津の
さ津のさ津の

十五 左道

さ津のさ津のさ津の

らんちよふ糸溜の中ははら
こ中へあめさくちりしれ
あつり半あしとて決り
着の多細なまあつて流
つてせぬ久こかく意中
いふ行志ヤんもと出た子
はくもつらむあつて出た
糸溜中あつてあつてとなく
とらん業れ記物あつてあつ
やらんもつらむあつてあつ
決りぬ着の多細なあつて
濃介と流あつてあつてあつ
れ舞也と名あつてあつてあつ
のきりりりりりりりりり
中へいあつてあつてあつて
こらん業れ記物あつてあつ
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

十六 松尾

こらん業れ記物のあつてあ
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

兼初夜成りて家なりと
われぬる路のやとらむ
安んじたるをりてしよと
文におまれはるるよと
しよとらむとてしよ

三十五 又の巻

そと金佛の行名とて
やせししはるるよと
の人とてはるるよと
とちとてはるるよと
くくくくくくくくく

若はてしよとらむとて
あつるの事はるるよと

定家

はるるよとてはるるよと
くくくくくくくくく
はるるよとてはるるよと
くくくくくくくくく
のよとてはるるよと
くくくくくくくくく
はるるよとてはるるよと
くくくくくくくくく
はるるよとてはるるよと
くくくくくくくくく
はるるよとてはるるよと
くくくくくくくくく
はるるよとてはるるよと
くくくくくくくくく

聖女日記

是も遠國の方の者にてこと
以てくらかきしつにせし
けり塚女傳の如く女を
の謂ふ事ゆゑにはは
くはよき事なりと
申すものなり
けり人の女を
いふ事なりと
申すものなり
けり人の女を
いふ事なりと
申すものなり

花のは半さう
よのら花相向の
云はれし
けり人の女を
いふ事なりと
申すものなり

毒花

花のは半さう
よのら花相向の
云はれし
けり人の女を
いふ事なりと
申すものなり

山崎の主人は松本に
中人を以て其の意を成す
はてしなくいふ事あり
夕暮れは常しや子細は
いふ事ありては中を
多岐にわたる事あり
わが身はしる事あり
ゆるぎなき事あり
祈りていふ事あり
わが身はしる事あり

久松松本

しる事ありては中を

ゆるぎなき事あり

祈りていふ事あり

久松松本

ゆるぎなき事あり
祈りていふ事あり
わが身はしる事あり
ゆるぎなき事あり
祈りていふ事あり
わが身はしる事あり
ゆるぎなき事あり
祈りていふ事あり
わが身はしる事あり
ゆるぎなき事あり
祈りていふ事あり
わが身はしる事あり

しんじやく 後父のいそ
らりか下りて云

至二年春

之つる海人 言と時々のこと
ふかんとしつるを合可なり時々

しやく実つる雲の月を

面白く又わくを波の舟上

けりとも曲うらやしくこかく

しつらうとくしんとこかく

いふく毎に神楽舞し有

らんねしはゆき

他はさうのいふこと云々
アハハハ

又程さういふこと云々
しつる月

こかくのちのちうらやしい

月をさういふこと云々
又

かみは月か

我々の心算は、
省の改を第一とし、
少く改むるべし。

是れをア、イ、ウ、エ、オ、カ、
ク、ケ、コ、カ、ケ、コ、カ、
社、政、と、ト、ス。

又十八分として、
つや、く、た、か、と、り、三、つ、
と、新、し、を、

六、**形**見

と、う、く、し、
つ、や、く、た、か、と、り、三、つ、
と、新、し、を、

七、**阿**漕

鳥、行、く、
那、と、
先、下、
是、を、
左、
此、
う、
と、
凡、
復、
源、

宵と或人其世はたも
ねめ感ら布と物言は
しつらびらるるまどわら
あはれ行はるる物
らつてあめ細布の滑
あまの口物うそまなま
かつらあめらめ物言
見せんそはまもあ
やめ家の滑あま
又ゆき家の物入あ
んそあまあまあ
いこかくとらるる遠五

あまあまあまあま

あまあまあまあま

十三 新ら大物 ねまあり
まきまき

行し西衣うの物あま

あまあまあまあま

あまあまあまあま

十四 唐取

あまあまあまあま

あまあまあまあま

あまあまあまあま

あまあまあまあま

あまあまあまあま

西有谷一そと好く
アリこく文不對也
くくあは方とていふ人
くくいふに作るといふ
初藤あふ人其朝の御
アテうらわらう美を能く

十五 山徑

去る行々大泉の
可好よとて海あり
少は人申すも
此有あふとていふ人
くくこくくくく

存一はものから
くくくくくくく
くくくくくくく
細き海つとていふ人
意よとて行ふとていふ
くくくくくくく
老人とていふ人
あふとていふ人
くくくくくくく
くくくくくくく

いづかきもくもくといふ

天六はなるといふ

わらう同敷な津仕はらねん

とふしつてむとむとむと

せんあくとんいふあふ

くらねんをきあふのはかよ

いあくのいふなふ

いふあふあふあふあふ

いふいふあふあふあふ

あふあふいふいふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

主徳返

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

遊依んかゝりてしるふに
あやうに不戸ぬまにむね
留りてまのこころをたす
ま

三十四 新の僧

いふ誰の有こころを
之清へをあしするこころを
清く入る女細のこころを
うたふなりしやんちんか
るこころをわらう者
しるこころをわらう者
のこころをわらう者
こころをわらう者

をいふ白の影下し
しよを流るはけい
つとそゆりしを
うら

三十五 舍利

山々の人の海からこころ
あやうの国に保の国
くら増くこころの
なとそつとそん
くらすち羅漢又用舍利
よむのこころを
こころをわらう者

あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ

佛の御方にこそわづらひ
あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ

三十五、和歌州

四別とあはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ

三十六、大佛の御方

あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ

三十七、柳花

あはれにこそわづらひ
あはれにこそわづらひ

の人の病やひらきく是より
おまのたぶなとてまのひらき
きよはなれに〜人様をたて
まのまじりていふまじりていふ

三十九 記月

まの行ふまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの

辛 神女

い小難の者 ニカイヤク 正おはく
因に軍得たにま〜あつちうそ
有り ニカヤク まのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの

甲の入長^{三十一}とらうに雅う有
言く馬^{三十一}とらうに雅う有
軍勢の中ふらうに雅う有
とま^{三十一}とらうに雅う有
馬と目^{三十一}とらうに雅う有
志^{三十一}とらうに雅う有

四十一 五五保

何^{三十一}とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有

とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有

甲二 五五保

とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有
とらうに雅う有

新島にありては流人の名
をよみて日々にさへし
身も命も伊力よせ
くちのくちありぬ
小島に伊力ありては石
守もな山人ありては
流人の名ありては
流人の名ありては

存
トイロケルトキハ
あつちの
みよりの

新島

と流人の名ありては
由は伊力と伊力の
流人の名ありては
伊力と伊力の
伊力と伊力の
伊力と伊力の
伊力と伊力の
伊力と伊力の
伊力と伊力の
伊力と伊力の
伊力と伊力の

かろぬ神人道多う人
こしは女はけいれぬ由は
渭流のりる立田唯を成と
石室あり人印社控るなり
へ立うありんて築と成
かろてふとくくちるなり
成中〜〜〜
か〜〜〜
う〜〜〜

甲五 石橋

らん〜〜〜
流〜〜〜

るあて流〜〜
はる〜〜
く〜伊法流のなあり
目と〜
流〜
よ〜
江〜
成竹林上〜
河〜
途多と

甲六 中〜

〜

平山あをこも白雲霞分天
のてらねはあゆむしんこく
花よよ来、源氏の世をよ
うしるるにけり

曰 若狭のあゆむは世をよ

かり不たあふる事のはあ
只今の中はあゆむの世を
くかりあゆむしんこく
花よよ来、源氏の世を
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく

一、あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく

幸 春日歌神

あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく
あゆむしんこく

てんじやくんが源文の事
案の由よわらへ佛治の紙
おまへあひあひの事
いかに正なるに候か
今に何れに
いかに
名うするに
は
の
お
い
い

